九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ハンス・ドリーシュと超心理学 ： 「エンテレヒー」の行方(2)

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院 ： 教授

https://doi.org/10.15017/1832793

出版情報：言語文化論究. 39, pp.1-19, 2017-09-01. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

ハンス・ドリーシュと超心理学
――「エンテレヒー」の行方（2）――

福　元　圭　太

はじめに

本稿は前稿[1]に引き続き、ハンス・ドリーシュの「エンテレヒー」に関する研究を進展させるものである。本稿ではドリーシュの1932年の著作『超心理学』（*Parapsychologie*）を中心に検討し、この著作がドリーシュ生気論（Vitalismus）の鍵概念である「エンテレヒー」の問題圏においてどのような位置を占めるのかについて考察する。

１．超心理学への関心

ドリーシュが超心理学的な現象、すなわち催眠術（Hypnotismus）、暗示（Suggestion）、意識の分裂（Bewusstseinsspaltung）、テレパシー（Telepathie）、透視ないし千里眼（Hellsehen, Clairvoyance）、予言（Prophetie）、サイコメトリー（Psychometrie）、[2] 隔動現象（Apport）、[3] 念動ないし精神的遠隔操作（Telekinese）、物体浮揚（Levitation）、ラップ音（Rap）、幽霊現象（Spuk）、精神の物質化（Materialisation）等々に興味を持ち始めたのは、1932年に著作として『超心理学』を上梓するかなり前に遡る。ドリーシュは自伝で、「私はすでに1903年以来、心身問題（das Leib- und Seele-Problem）との関連において、心理生活（Seelenleben）に関する学説の根本的な問題に取り組んできた」[4] と述懐している。ドリーシュはまた1913年以来、ロンドンで1882年に創設された「心霊研究協会」（Londoner Society for Psychical Research）のメンバーであり、1926年と27年にはその会長職にあった。[5] 超心理学的な現象を詳しく研究したドリーシュは、「『心理的』（psychisch）な超常現象、すなわちテレパシー、透視、サイコメトリー、おそらくはまた予言が実在することを完全に確信」[6] していた。しかしドリーシュは「物理的」（physisch）な超常現象については「どちらかと言えば懐疑的」[7] であった。ドリーシュはミュンヒェン在住の著名な心霊研究家であるアルベルト・フォン・シュレンク−ノッツィング男爵（Albert Freiherr von Schrenck-Notzing; 1862-1929）の心霊実験に参加し、当時「霊媒」（Medium）として有名だったヴィリ・シュナイダー（Willi Schneider）の物理的心霊現象の実験に立ち会っている。この実験（Sitzung）では「トリックの可能性」（Betrugsmöglichkeit）は見つからず、ヴィリの「化けの皮を剥ぐ」（entlarven）ことはできなかったけれども、「学問的な意味において実験の条件が完全に満たされたものであったとは言い難い」[8] としている。なおシュレンク−ノッツィング男爵の下で行われた一連の実験にはトーマス・マンも参加しており、この時の経験をのちのエッセイ「オカルト体験」（*Okkulte Erlebnisse*. 1924）にまとめている。またこの体験は当時執筆中であった長編『魔の山』にも色濃く反映しており、作中人物クロコフスキー医師による、多分に性的なニュアンスを含んだオカルト的集会や、終盤近く第７章の「ひどくいかがわしいこと」

（Fragwürdigstes）の節で、戦死した従兄ヨアヒムの霊を主人公ハンス・カストルプが降霊会で呼び出すシーンに応用されていることは、マン研究者の間ではつとに知られている。[9] しかしマンのエッセイや『魔の山』については本論の趣旨からそれるので、別の機会に論じたい。

ドリーシュは20年代以降、超心理学やその周辺の諸問題についての講演や著作活動を積極的に展開している。例えば1925年には「超心理学と公認された科学」、[10] 26年には「不死性について」、[11] 1927年には「超心理学の理論構築の方法」、[12]「超心理学における確実性の問題」[13] および「超心理学と哲学」[14] を発表、20年代後半にはその他にも新聞や雑誌に多数、超心理学やオカルティズム、心身問題や物質主義の克服に関する文章を寄せている。[15] このような経緯ののち1932年に、総まとめの著作として『超心理学』が上梓されるのである。

２.『超心理学』

ドイツの思想・哲学は超常的な現象をどのように説明するかという問題を回避してきた。その傾向を方向づけたのは、スヴェーデンボリを揶揄したカントの『視霊者の夢』（*Träume eines Geistersehers*; 1766）であった。[16] この問題に例外的に取り組んだ哲学者はショーペンハウアーである。ドリーシュは1932年の著作『超心理学』── この分野での「最初の方法論的学説」[17] ── の冒頭、ショーペンハウアーの以下の文をモットーとして掲げている。

> 「今日動物磁気[18]やそれによる透視[19]を疑う人は、物事を信じないのではなく、物事を知らないと言うものだ。」　ショーペンハウアー「パレルガ」I, 1850年
> „Wer heut zu Tage die Thatsachen des animalischen Magnetismus und seines Hellsehens bezweifelt, ist nicht ungläubig, sondern unwissend zu nennen.“　Schopenhauer, Parerga I, 1850[20]

ドリーシュの『超心理学』は、超常的・超心理学的な現象を多数例示し、それらの実在性を読者に確信させようとする通俗的「オカルト本」の常道を行くものではまったくない。むしろその正反対である。

ドリーシュは序文で、同書第一部の意図が、超心理学的な実験において「いかにして意図的ないし意図的ではないトリック（Täuschung）を回避することができるか」[21] を論じることにあると言う。事実、初版全149頁中、約３分の２にあたる７から91頁までの第一部は、トリックの排除はいかにして可能かという問題に費やされている。

また第二部（93から146頁）の意図をドリーシュは、超心理学の「理論を構築するにあたってのexperimentum crucis は何かを問うこと」、[22] つまり超心理学理論の科学的基盤を問うこと、と規定する。

ドリーシュの『超心理学』の眼目は以上のように、超心理学的現象の事実性を厳しく同定する方法論の模索（第一部）、ならびに、もしそれらが事実であるならば、超心理学的現象はどのように理論化されうるのかを問うこと（第二部）にあった。これはとりもなおさず、超心理学的をひとつの学問として真剣に扱おうという姿勢の表れであると言えるであろう。

少数ではあるものの、超心理的な現象が実在することを、ドリーシュは確信している。さもなければドリーシュはそもそもこの本を書かなかったであろうし、「『オカルト主義者』たち自身と彼らの運命にこの問題を任せて」[23] いたことであろう。

一般的に言って、神秘主義やオカルト的なものに対して我々は、「極端な批判者」と「無批判な信奉者」に分かれることが多い。超心理学についても事情は同様である。ドリーシュは前者を「否定

的な独断論者」(die negativen Dogmatiker)、後者を「極端な信者」(die allzu Gläubigen) と呼ぶ。しかしドリーシュ自身はどちらにも属さず、「健全な懐疑家」(die gesunden Skeptiker)[24] の一員であることを自認している。

また、同時代のヨーロッパにおけるこの方面の研究に、国によって遅速があることをドリーシュは認識していた。すなわちイギリス・フランスに比べてドイツの超心理学研究はかなり遅れていたのである。ドイツにおけるこの領域の研究を進展させるためには、ロンドンのそれにならった超心理学研究協会のような組織と、フランスにあるような研究所 (Froschungsinstitut) が必要だとドリーシュは言う。[25] 細かい配慮ではあるが、そのような協会や研究所から雑誌を発行することにドリーシュは否定的である。なぜなら、締め切りを守るために「どうでもよいもの、空想にすぎないもの、あるいは怪しげなもの (Gleichgültiges, Phantastisches oder Bedenkliches) も掲載しなくてはならない」[26] からである。

2-1. 第一部

以下、『超心理学』第一部の内容を概観する。

超心理学の実験には常にトリックの可能性が潜んでいる。もっともこれはこの分野に限った事ではない。ドリーシュは生物学の分野でここ20年の間、すなわち1910年あたりから1932年頃までに、そのような事態が何度かあったことを指摘する。「獲得形質の遺伝」(Vererbung erworbener Eigenschaften) という理論がそれによって「完全に無価値に」(völlig wertlos) なった、とドリーシュは言う。それは「助手や技官のやったことかもしれないが」[27] トリックないし捏造であるという非難は避けられない。[28]「[…]『人間』は残念ながら無意識的ないし意識的なトリックを行う能力が備わった生き物である」([...] der „Mensch“ ist leider ein der unbewußten und der bewußten Täuschung fähiges Wesen)[29] というのがドリーシュの見立てである。

自然科学の実験におけるトリックの責任は、実験者ないしその助手等に帰せられよう。しかし超心理学の実験では ── 意識的か無意識的かにかかわらず ── トリックの仕掛人は一元的ではない。つまり実験者ないしその助手がトリックを行う場合と、当の実験の被験者ないし実験対象 (Untersuchungsobjekt) である「媒体」(das Medium あるいは der Metagnom) がトリックを行う場合が考えられるのである。ドリーシュによれば、これまでは後者、すなわち「媒体」の側がトリックを仕掛けたケースが、残念ながら多数あったという。

その後ドリーシュは、いかにしてトリックを防ぐかという方法を縷々述べる。しかしながら、結局のところ注意深い観察 (Beobachtung) と厳密な実験 (Experiment) が肝要であるという主張に帰着するだけであって、ドリーシュがこの書においてトリック回避のための根本的な方法論を確立しているとは言いがたい。

例えば物理的な心霊現象を検証する場合、現象の報告者が幻想癖のある人間か理性的な人間か、しばしば譫妄状態 (Halluzinationen) に陥る人かどうか、よく嘘をつく人か、興奮していたか、現象が起きた場所は暗くなかったか、報告者は疲れていなかったか、夢を見ているような状態ではなかったか等に注意すべきである云々。いわゆる「幽霊屋敷」の場合、そこに例えばネズミはいなかったか、誰かのいたずらではなかったか、石が投げられたのではないか、等々。またテレキネーゼの場合、部屋に怪しげな針金や糸はなかったか、強い風が吹いていなかったか、それでカーテンが動いたのではないか等々に注意しなければならないと述べる。[30]

また心理的な心霊現象、たとえばテレパシーの場合、概略以下の５つの条件をすべて満たした場合のみ真正なものと認められる、とドリーシュは主張する。

1．テレパシーによる伝達内容が実現される前に、その内容が紙に書き残されているか、信頼できる人物に語り伝えられていること。これは「記憶違い」による前後関係の混乱を回避するためである。
2．これまでの漠然とした夢や予感といったものとは隔絶した、特別なビジョンや幻聴や予感を感じた場合。
3．ほかの人たちが経験した数多くのテレパシーのケースに似たようなケースである場合。
4．超常的に得られたテレパシーの内容と生起した出来事の間に、時間的、また内容的な一致が見られる場合。
5．もちろんテレパシーの送り手（Sender ないし Agent）と受信者（Empfänger ないし Perzipient）の距離が十分に離れており、両者が互いを直接見たり聞いたりということ、あるいは直接的に知覚過敏（Überempfindlichkeit ないし Hyperästhesie）によって通じ合う可能性が完全に排除されていること。[31]

その他例えば真っ暗闇は避けるべきである、[32] いわゆる「霊媒」は証人たちの前で一度着ているものを脱ぐべきである、[33] すぐに脱げるような靴ではなく、紐靴か乗馬用の長靴を履くべきである、[34] 針金や糸、長い棒などがないか、部屋の中をくまなく点検すべきである[35]等々、さらに観察者たちは集団催眠に対して気をつけなくてはならない[36]といった「諸注意」が述べられるが、特段の決定的なトリック防止法が述べられているわけではない。

たしかにドリーシュは、トリックを見破る厳しい審判者として恐れられていた。

> テレパシー実験のグループではドリーシュの筆鋒はひどく恐れられていた。というのも「媒体」の中でドリーシュの眼鏡にかなうものはほとんどいなかったからである。ドリーシュは妥協することなく、彼らの多くが贋者であることを暴露した［…］。
> Drieschs Feder war in den telepathischen Kreisen durchaus gefürchtet, denn kaum eines dieser „Medien“ hat ihn überzeugt, manche hat er ohne Kompromisse zu machen als Fälscher entlarvt [...][37]

しかし『超心理学』においては上述のように、注意深い観察と厳密な実験が推奨されるに終始する。トリックを完全には排除できないことは、ドリーシュ自身も認めるところである。

> ［…］媒体の側の、あるいは参加者の誰かによる手品師的なトリックを――それが意識的なものであれ無意識的で夢遊病的なものであれ――実験の諸条件から完全に排除することができたケースは、これまでに一度もない。
> [...] in keinem einzigen Fall die Untersuchungsbedingungen eine taschenspielerische Täuschung seitens des Mediums oder eines Teilnehmers vollständig ausschließen konnten — mag es sich um bewußt oder um unbewußt-somnambulen Täuschung handeln.[38]

先述した高名なシュレンク-ノッツィングの実験についても、事態は同様である。ここで行われた念動および精神の「断片的な物質化」（fragmentarisch[e] Materialisation）をドリーシュは「高い確率で真正のものである」（echtheitswahrscheinlich）としているが、「実験条件を改善してさらに考究する必要がある」（hier sollte weitergearbeitet werden unter Verbesserung der Bedingungen）[39] という留保をつけている。

2-2．第二部

次に『超心理学』第二部を概観する。

第二部は超心理学の理論編である。結論を先取りすれば、ドリーシュがここで超心理学に関する体系的な理論の構築に成功しているとは言い難い。もっとも超心理学的現象がいまなお謎の多い領域であり、科学的な実態の解明が「進んでいない」という事の性質上、そもそも明確な理論の構築自体が不可能事であるとも言えよう。

しかしいくつか重要な記述がある。まずは「知（Wissen）の伝達（Übertragung）」に関する記述である。ドリーシュは超心理学的現象を「純心理的な」（reinpsychisches）ものと「精神物理的な」（psychophysisches）[40] ものに分類する。前者にはテレパシー、透視、予言等が、後者には隔動現象、精神的遠隔操作ないし念動、物体浮揚、ラップ音、幽霊現象、精神の物質化等、心理的現象に物理的現象が付随するものが含まれることになる。サイコメトリーはその中間項に位置すると考えてよいであろう。ドリーシュは特に前者に注目し、テレパシーと透視について詳述している。

テレパシー（およびその変種である読心術（Gedankenlesen））ならびに透視の場合、何らかの「知」の伝達ないし「知」の獲得が問題となる。しかし重要なのは「知」の内容そのものではなく、その「知」の伝達ないし獲得の「経路」である。いわく

> ［知の］獲得の経路のみが超常的なのである。
> Die *Wege* des Erwerbs allein sind das Paranormale.[41]

問題は、「知」の伝達ないし獲得「経路」が超常的であるということに集約される。ドリーシュはこのような「知」の受け手を、先述したように「受信者」（Empfänger ないし Perzipient）と呼ぶ。

■透視

透視は、獲得された「知」の内容が「自然の客観的な事柄」（objektive Sachverhalte der Natur）である場合をいう。ドリーシュはまた空間と時間というスカラを導入し、透視を以下の３つのカテゴリーに分類している。

１．空間的透視（Raumhellsehen）：受け手と空間的に離れている知の獲得
２．過去透視（Rückschau）：過去に関する知の獲得
３．予見あるいは予言（Vorschau あるいは Prophetie）：未来に関する知の獲得[42]

■テレパシー

「知」の内容が上記の「自然の客観的な事柄」ではなく、「他者の知の内容に関する知」（Wissen um die *Wissensinhalte anderer Personen*）である場合をいう。上記の「他者」が「知」の送り手（Geber ないし Agent）である。「知」は、送り手が「自らの心的経験の内容を個人的に受け手に与える」（Inhalte seines seelischen Erlebens personal an den Perzipienten hingibt）ことによって伝達される。テレパシーの場合、送り手は自分の「［…］心的内容を、無意識的か意識的かにかかわらず積極的に送り、受け手がそれをただパッシブに『受信する』」（[...] gibt seinen seelischen Inhalte aktiv her, sei es unbewußt oder bewußt, während der Perzipient rein passiv „empfängt“）。[43]

■読心術

「逆に受け手がアクティブで、たとえ無意識的にでもそれを受信したいと『意志』し」（umgekehrt

der Perzipient aktiv ist, er „will“, wenn auch unterbewußt, empfangen)、送り手の方が「単にパッシブな方に回る」(der schlicht passive Teil)[44] ならそれは読心術と呼ばれる。

これらいずれの場合も、「知」がある経路を通って獲得ないし伝達されるのであるが、重要なのは、その経路が超常的であるということ、すなわち、「他者の知の内容の獲得が感覚器官の仲介なしに」(*Erwerb des Wissensinhaltes eines anderen ohne Vermittelung der Sinnesorgane*)[45] 成就されることである。

『超心理学』後半部においてもドリーシュはもう一度このことを強調する。

> 知は知、知の獲得は知の獲得であってそれ以上のものではない。知の獲得の経路が超常的なのである。知の獲得はすなわち感覚器官ではなく ── 他の方法を通じて成就する。
> どうやってそれが成就するのかをわれわれは探求しようとする。──
> Wissen bleibt Wissen, und Wissenserwerb bleibt Wissenserwerb. Der *Weg* des Wissenserwerbs ist das Paranormale; er geschieht nämlich nicht vermittels der Sinnesorgane, sondern — anders.
> Wie er geschieht, das wollen wir nun zu erforschen versuchen. —[46]

しかし対象の性質上、また歴史的に見ても、この「探求」に十全な回答が与えられないであろうことを、ドリーシュは予見できていたはずである。それでは、ドリーシュはいったい何のためにこの領域の研究を進め、何のためにこの本を書いたのであろうか。

ドリーシュは一応このように答えてはいる。

> 今日まだ見つかっていない証拠が見い出されんことを。そうなれば我々の世界像は格段に豊饒なものになるであろう。
> Ich würde mich freuen, ergäbe sich dieser heute noch vermißte Nachweis einmal. Denn er würde eine große Bereicherung unseres Weltbildes bedeuten.[47]

ドリーシュは、ただ我々人間の世界像をより豊かなものにするためだけに、この本を書いたのであろうか。それとも何か別の意図もあったのであろうか。

3．エンテレヒーと超心理学

超心理学的現象の事実性の確認、および超心理学の理論構築を目指すドリーシュは、ひとえに超心理学をひとつの学問、ひとつの科学として認知しようと努力しているように見える。それはドリーシュが極めて柔軟な頭脳の持ち主であったこと、また対象（Sache）に献身する学者であったこと、さらには事実（Tatsache）をそれとして認める実際的な人物であったことの証左でもある。

例えばクレックラー男爵の占星術に関する本[48]の導入[49]にドリーシュは「好意的な中立性」(wohlwollend[e] Neutralität)[50] を擁護しつつ、以下のように書いている。

> ア・プリオリな根本的否定を批判的な哲学者がよしとするのは、対象に内的な矛盾が存在するときのみである。占星術の教説に関してそのような内的矛盾がないことは確実である。
> Radikales Negieren a priori darf ja der kritische Philosoph nur da kennen, wo innere Widersprüche

vorliegen, und das ist bei der astrologischen Lehre mit Sicherheit nicht der Fall.[51]

また何度も登場するシュレンク − ノッツィング男爵が1929年に没した後、同年中に刊行された同氏の遺稿論文集の導入においてもドリーシュは、故人の偉業を称えつつ、以下のように書いている。

超心理学はゆっくりと水面へ浮上しつつある大陸に似ている。そのいくつかの山頂だけが、ようやく島として海上に聳え始めた。シュレンク−ノッツィングは、これらの島の一つを開拓し、寄せ来る大波からその島を守っているのである。
Die Parapsychologie ist einem Kontinent vergleichbar, der sich langsam aus dem Wasser hebt; nur einige Berggipfel erst ragen als Inseln aus dem Meere hervor. Eine dieser Inseln hat Schrenck-Notzing bebaut und sie gesichert gegen die anströmenden Wogen.[52]

他人の著書への導入のみならず、『超心理学』自体にももちろん、同様の主張を見出すことができる。本の冒頭でドリーシュは、人は自分が「啓蒙されている」(aufgeklärt) と思っていても実は「独断的」(dogmatisch) であるということがあるものだ[53]と書く。またドイツの大学は「あらゆる新奇なものに対して批判的」(kritisch eingestellt sein allem Neuen gegenüber)[54] で、超心理学というような領域には目を向けない、「考え方を転換すること、自分の世界像を根本から変更することを人は疎う」(Umlernen, sein Weltbild ganz grundlegend umgestalten, das will man nicht)[55] からである、と書く。しかし

[…] 超心理学を前にして我々は、世界像の転換の可能性、過去・現在を通じて比類のない世界像の転換の可能性に向き合っている。ここには本当に宝が埋まっている […]。
[...] angesichts der Parapsychologie steht man vor einer möglichen Weltbildumgestaltung, die überhaupt nicht ihresgleichen hat oder je gehabt hat. Hier ist wirklich ein Schatz zu finden [...][56]

と主張する。

また『超心理学』の結論においてドリーシュは超心理学を、実験におけるトリックの可能性は完全には排除できないと主張していたにもかかわらず、「明確に学問である」(ausdrücklich als *Wissenschaft*)[57] と見なす。さもなければ、先述したように、ドリーシュはそもそもこの本を書かなかったであろう。「奇跡」(Wunder) でも「神秘」(Mystik) でもなく[58]「まことに、超心理学は真の啓蒙である」(In Wahrheit ist Parapsychologie echte *Aufklärung*)[59] と言うドリーシュは、著書を以下の文言で締めくくっている。

事実上可能なことと不可能なことを始めから分けることができると考えている者、そしてそれどころか実際に証明されたことに目を閉ざす者は、真に啓蒙的な学問を害する者である。
Wer da meint, von vornherein über sachlich Mögliches und Unmögliches entscheiden zu können, und sich dann noch gar dem als tatsächlich Erwiesenen verschließt — der schädigt echte aufklärende Wissenschaft.[60]

トリックが潜在しうることを知っていながら、超心理学は「真の啓蒙」であり、真剣な学問であるとするドリーシュが、それをもって「超心理学そのもの」のみならず、「超心理学と共に」、いさ

さか強引ともうつるやり方で、何を擁護しようとしたのか。我々はその答えをドリーシュの論述の端々に見出すことになる。

同書「あとがき」で超心理学が「奇跡」でも「神秘」でもないことを強調した後、[61] ドリーシュは、わざわざ「ついでながら」（übrigens）と断った上で、このように続けている。

> ついでながら、私の生気論は時おり、その意味するところを全く取り違えて、「神秘」と呼ばれたことがあったのだ！
> Hat man übrigens doch auch gelegentlich, in völliger Verkennung der Bedeutung des Wortes, meinen Vitalismus „Mystik“ genannt![62]

ドリーシュが言う「生気論の意味の取り違え」、つまり生気論が「神秘」であるという「誤解」はなぜ生じたのであろう。それは、超心理学的現象とドリーシュ生気論におけるエンテレヒー概念には、共通して「空間外の経路」という問題が関係してくるからである。

前稿で論じたエンテレヒーの概念を確認しておきたい。アリストーテレスの「エンテレケイア」に由来するエンテレヒーは、「生命現象の中で何らかの役割を果たしている、『目的をそれ自身の中に含んでいるところの』何物か」[63] を意味する。それは機械論的には説明できない全体性を目指す何らかの志向、因果性では説明できない目的論的ポテンツであり、生物学的に言えば、調整卵に見られる調和等能系を可能にする要因[64] であった。

> エンテレヒーはエネルギーではなく、力でもなく、強度でもなく、定数でもなく――エンテレヒーである。
> Entelechie ist *nicht* Energie, *nicht* Kraft, *nicht* Intensität und *nicht* Konstante, sondern Entelechie.[65]

それは物理・化学的には説明できず、物質でもエネルギーでもなく、「エンテレヒーは［…］エンテレヒーである」というトートロジーでしか書けない何物かである。エンテレヒーはそれではどこからやってくるのか。

> 我々はまさにこう言うことがでる。エンテレヒーは、あたかも空間の彼方から到来したかの如く、空間の因果律に捕捉されることによって空間の因果律に作用する。エンテレヒーは空間内で作用するのではなく、空間内へと作用する。エンテレヒーは空間内には存在しない。ただその顕現の場所が空間内にあるというだけである。
> Wir können geradezu sagen: Entelechie wird von räumlicher Kausalität affiziert und wirkt auf räumliche Kausalität, als wenn sie von jenseits des Raumes herkäme: *sie wirkt nicht im Raum, sie wirkt in den Raum hinein;* sie ist nicht im Raum, im Raum hat sie nur Manifestationsorte.[66]

一方超心理学における知の獲得に際しては、知の伝達が「空間外の経路」を通って成就するという点こそが超常的なのであった。

> 超常的な知の獲得に際し、送り手と受け手、あるいは（透視の場合）対象と受け手の間の当該の知の伝達は、我々の知る限り、空間内では、より正確に言えば、空間という経路ないし空間を通っては、成就しない。しかし実際に知は伝達されているのであるから、我々は「空間から」

飛び出し、知られざる伝達手段へ目を向けざるを得なくなる。
Im Raum, oder besser gesagt, auf Raumeswegen oder durch den Raum hin kann nach allem, was wir wissen, die Übertragung zwischen dem Agenten und dem Perzipienten oder (beim sogenannten Hellsehen) zwischen Objekt und Perzipienten bei paranormalem Wissenserwerb nicht stattfinden. Also müssen wir, weil sie ja eben doch stattfindet, „aus dem Raum“ hinausgehen, in unbekannte Übertragungsmittel hinein.[67]

エンテレヒーについて詳しく論じられている『有機体の哲学』は４版まであるが、内容をコンパクトにまとめ、一部改稿された1928年の第４版（Vierte, gekürzte und teilweise umgearbeitete Auflage）がドリーシュ有機体哲学の最終バージョンである。先の「エンテレヒーは、あたかも空間の彼方から到来したかの如く」云々はこの第４版からの引用である。ドリーシュが20年代後半、超心理学に関する論文を数多く発表していたことは先述したが、超心理学的な研究と『有機体の哲学』の最終的な改稿作業は時期的に重複していたことになる。

「我々の全体験と全経験は空間（と時間）の形式に否応なく結びついていると人は言うであろう」（Man wird sagen, unser ganzes Erleben und Erfahren sei an die Form des Raumes (und der Zeit) unweigerlich gebunden）[68] が、超心理学的な現象ならびにエンテレヒーについては、その限りではない。ドリーシュはここで、カント的な認識の枠組みから逸脱していると言わざるをえない。すなわちドリーシュのエンテレヒーも、超心理学における知の伝達も、空間の軛から「外」に出なくては説明がつかないのである。有機体への何らかの作用は、通常の場合、物理化学的な基盤を持つはずであるが、超心理学における知の獲得が感覚器官を経ないで空間外を通って受け手に届くのと同じように、生気論におけるエンテレヒーも空間を経由せず直接有機体に作用するのである。生気論においては

［…］物質的基盤を持たない、むしろいわば「空間内へ」作用する因子（＝エンテレヒー：福元）を導入せざるを得ない。それゆえに生気論は超心理学へと架橋されるのである。というのも生気論はすでに「空間外へ超出している」からである。この因子はいみじくも有機的なものが因果論的に理解されるべきであるとすれば、必ず存在しなければならない。［…］それは必ず「存在」しなければならない ── このことを、もう一度強調しておきたい。もし我々が因果論的な「説明」を放棄したくないのであるとすれば。
[...] nicht von Materie ausgehende, sondern vielmehr, sozusagen, „in den Raum hinein“ wirkende Agentien einzuführen, weshalb eben der Vitalismus eine Brücke zur Parapsychologie darstellt, da auch er schon „aus dem Raum hinausgeht“. Diese Agentien müssen da sein, wenn überhaupt das Organische kausal verstanden werden soll; [...] Sie müssen „da sein“ — das sagen wir noch einmal ganz ausdrücklich; es sei denn, man wolle auf ein kausales „Erklären“ verzichten.[69]

ドリーシュはエンテレヒーの「空間外の経路」として、例えば「４次元空間」[70] などを想定しているわけではないが、それではエンテレヒーという因子はどこに存在するのかと問えば、「空間外」と言わざるを得ないとするのである。[71]

以上のように、超心理学を学問の一つ、つまり科学として定位することによってドリーシュは、「空間外の経路」がなければならないという了解を取り付け、それをもって自らのエンテレヒーの概念をも擁護しようとしたと言うことができよう。

４．エンテレヒー概念の拡大

ドリーシュはエンテレヒー概念をさらに拡大していく。

ドリーシュの生気論の端緒は、ウニの二細胞期の胚を分割し、その片方から完全な幼生を得たことから、個体としての有機体には目的論的に全体性へ向かって成長する志向があるはずだ、と考えたことにあった。[72] エンテレヒーとはまさにその「『全体性をもたらす』X因子」（„ganzmachend[e]“ X-Agentien）[73] の謂いであった。エンテレヒーはつまり、当初は、個体を成体へと導く何物かを意味していた。しかし超心理学的現象の研究を進めるにしたがってドリーシュは、エンテレヒーを「個体を超えた何物か」（etwas Überpersönliches）、[74] さらには「生あるものすべて」（alles Vitale）に作用する何物かと捉え始める。それは「空間中で顕現する限りにおいて『空間』と関係するが、空間内には存在せず、空間を経由して作用するわけではない」（mit „Raum“ nur insofern zu tun hat, als es sich in ihm manifestiert, das aber nicht im Raum ist und nicht ihn hindurch wirkt）[75] 何物かであった。

そのような何物かがなければならない根拠としてドリーシュは、進化論的な系統発生（Phylogenie）、再生（Regeneration）、ならびに二つの卵からの「巨大な」一個体の発生（die Entwicklung eines „Riesen“-Organismus aus zwei Eiern）[76] を挙げる。

有機体の系統発生は「超個体的エンテレヒーのようなものを想定することなしに［…］理解不可能である」（ohne so etwas wie eine überpersönliche Entelechie [...] gar nicht verstanden werden kann）[77] とドリーシュは言う。ドリーシュはつまり、生物は全体として目的論的に進化しているとし、ダーウィンが主張する偶然性による淘汰を否定するのである。もっともドリーシュの主張の妥当性については議論の余地があるであろうが、ここでは立ち入らない。

またヒドラやプラナリア、また卑近な例として我々も観察したことのあるであろうイモリやトカゲなどに見られる再生は、損傷を受けた組織や器官、四肢などが復元される現象を意味するが、この現象に関してはたしかに「全体性を回復しようとする何らかの志向」を想定せざるを得ないであろう。

また二つの卵から二つの個体が生じず、大きな一つの個体が発生するケースも、個体を超えて一つの全体性を志向する作用の成就と言えるであろう。

このような「一であり多であるもの」（„Das Eine und das Viele“）が「超個体的な何物かについて語ること」（von einem überpersönlichen Wesen zu reden）[78] を余儀なくするとドリーシュは言う。この文脈でドリーシュは超個体的なエンテレヒーを想定するのである。

以上のようにドリーシュは、超心理学の研究からエンテレヒー概念の拡大へと考察を展開していく。しかし著書『超心理学』の眼目をもう一度繰り返せば、超心理学が理性的で啓蒙的な科学の対象になりうることを示し、それをもって自らのエンテレヒー概念を擁護する点にあったと言えるであろう。

ドリーシュは、一般に否定的なニュアンスとともに語られる「オカルティズム」（Okkultismus）や「心霊主義」（Spiritismus）に対してもニュートラルな姿勢を保つ。[79] それもまた、うがった見方をすれば、自らのエンテレヒー概念が怪しげな理論と取られていたことと関係するであろう。

先述したクレックラーの占星術に関する本の導入においてドリーシュは、生気論とオカルティズムを併置し、

> 生気論とオカルティズムはかつて「克服された」が、それらは今日、新しい厳密な形式を得て、

最盛期を迎えている。占星術に関しても、あるいはそのような事態に至るかもしれないし、そうならないかもしれない —— それは私には分からない。しかしありうべき知へと至る道は、決して断ち切られてはならないのである。

Vitalismus und Okkultismus waren auch schon einmal „überwunden“ und blühen heute in neuer strenger Form aufs Schönste. Vielleicht wird es der Astrologie ebenso ergehen, vielleicht auch nicht — ich weiß es nicht. Aber man soll möglichem Wissen nie die Bahn abschneiden.[80]

「それは私には分からない」という言明は、ドリーシュの知的誠実の証であると言えるであろう。

『超心理学』の序文の最後にはまた、これが書かれた時代批判とも読める文章がある。この本が出たのは1932年のことである。ただし文中の「オカルト主義」という言葉は、ここでは当時の一般の文脈にしたがって、否定的な意味で使われている。

超心理学は、今日の「神秘的」で「非合理的」な傾向とは何の関係もない。超心理学は、化学や地質学が科学であるのとまったく同様、科学である。「直観」などは超心理学とは無関係であり、その方法は実証的で帰納的である。［…］超心理学の研究はまったく「理性的」である［…］したがって超心理学は真の啓蒙に奉仕するものである。というのも理性的に研究することを「啓蒙のために」研究すると言うからである。

超心理学は真に啓蒙的な営みであるがゆえに、これを「オカルト主義」と呼ぶことはそろそろやめるべきである。　　ライプツィヒ　1932年７月10日　ハンス・ドリーシュ

Mit den „mystischen“, „irrationalen“ Neigungen der Gegenwart hat die Parapsychologie gar nichts zu tun. Sie ist Wissenschaft, ganz ebenso wie Chemie und Geologie Wissenschaften sind. Unmittelbar „schauen“ tut sie gar nichts, sie arbeitet positivistisch und induktiv. [...] ihre Arbeit ist durchaus „rational“ [...] Parapsychologie steht somit im Dienst echter Aufklärung, denn rational arbeiten heißt „aufklärend“ arbeiten.

Eben weil die Parapsychologie echte Aufklärungsarbeit leistet, sollte man endlich aufhören, sie „Okkultismus“ zu nennen.　　Leipzig, den 10. Juli 1932　Hans Driesch[81]

迫りくるナチズムがある種の神秘主義や非合理主義と親和性があること[82]にドリーシュは気づいていたのであろう。「啓蒙としての超心理学」をもってドリーシュは、この領域が、そしてまたエンテレヒーが、「今日の『神秘的』で『非合理的』な傾向」と無縁であることを宣したのである。

死後10年を経て出版された自伝[83]の末尾近くに、次のような記述がある。

私の超心理学的なものへの興味を［…］非合理なものへの愛着であると解釈する人は、私をまったくもって誤解している。私が最善の努力を傾注した、そしていまも傾注しているのはむしろ、事実性の合理的な貫徹に他ならない —— 私見によればしかし、まさにこの合理的な貫徹には、どこまでが事実で、どこから謎が始まるのか —— より正確に言えば、どこまでが今日ではまだ事実であり、今日でもなおどこから謎が始まるのか、という点を精確に確定することも含まれるであろう。

Ganz und gar hat mich mißverstanden, wer mein Interesse für das Parapsychologische [...] im Sinne einer Vorliebe für das Irrationale deutet. Mein höchstes Streben galt und gilt vielmehr der *rationalen* Durchdringung der Wirklichkeit — aber es gehört meines Erachtens eben mit zu dieser rati-

> onalen Durchdringung, daß man scharf den Punkt betont, wo sie aufhört, wo das Rätsel anfängt — besser gesagt, wo sie *heute noch* aufhört, wo *heute noch* das Rätsel anfängt.[84]

これを先に引いた一節、「ついでながら、私の生気論は時おり、その意味するところを全く取り違えて、『神秘』と呼ばれたことがあったのだ！」[85] と合わせて読めば、ドリーシュが徹頭徹尾合理的な手続きを踏もうとする科学者であったにも関わらず、そのエンテレヒー概念や超心理学への関心から、非合理な神秘思想家であるかのような「誤解」を受けた発生生物学者にして哲学者であったこと、またおそらくは今でもそうであること[86]がよくわかる。

ドリーシュは、超心理学に本格的に取り組む前の1900年からハイデルベルク大学に奉職していた。エンテレヒーについては、すでにその前年に論文を発表している。[87] また、先述のように、1903年以来ドリーシュは超心理学に興味を持っていた。[88] このハイデルベルク時代にドリーシュの同僚であったマックス・ヴェーバーの容赦ない言葉を引いておきたい。

> こんな男がここで哲学を講義しても構わないなどということは、スキャンダルそのものだ。
> Daß dieser Mann hier Philosophie dozieren darf, ist einfach ein Skandal.[89]

世界の脱魔術化と合理主義の貫徹を透徹した眼差しで見据えていたヴェーバーにとって、「ロマン主義的な生気論者の特徴」(der romantische Zug dieses Vitalisten)[90] を持つ（と「誤解」されていた）ドリーシュは、超常的なものに対してあまりに寛容であったと言えるであろう。[91]

（本論文は平成27年度～平成30年度科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号15K02416「ハンス・ドリーシュ『新生気論』の研究 ── 『エンテレヒー』の行方」の成果の一部である）

注

1 福元圭太：「ハンス・ドリーシュ試論 ──「エンテレヒー」の行方（1）──」『言語文化論究』第36号、九州大学大学院言語文化研究院、平成28年３月、１～13頁。http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/1655038?hit=1&caller=xc-search

2 特定の人物の所有物に触れて，そこから所有者に関する情報を読み取る心霊的な行為を指す。「探魂法」と訳されることもある。

3 心霊が憑依しているとされる霊媒が、物体を動かしたり、それを呼び出したりすること。

4 Hans Driesch: *Lebenserinnerungen. Aufzeichnungen eines Forschers und Denkers in entscheidender Zeit.* Ernst Reinhardt Verlag, München/Basel 1951. S. 201.

5 会長職を辞した後もドリーシュは世を去るまでこの協会の名誉会長という称号を与えられている。Vgl. Margarete Driesch: *Das Leben von Hans Driesch.* In: *Hans Driesch. Persönlichkeit und Bedeutung für Biologie und Philosophie von heute.* Ernst Reinhardt Verlag, München/Basel 1951. S. 19.

6 Hans Driesch: *Lebenserinnerungen.* a. a. O., S. 201f.

7 Ebd., S. 202.

8 Ebd., S. 202.

9 トーマス・マンは1922年の12月20日と23年の１月６日及び24日の３回、シュレンク-ノッツィング男爵のもとで行われた降霊会（Séance）に参加し、この体験を小説『魔の山』に取り入れ

る旨を、友人のエルンスト・ベルトラムに書き送っている。Vgl. Thomas Mann: *Große kommentierte Frankfurter Ausgabe*（＝ GKFA）. Bd. 5-2, S. 42. また、些事に亙るが、シュレンク−ノッツィング男爵の医学の師のひとりの姓が、『魔の山』の主人公ハンス・カストルプの従兄であるヨアヒムの姓Ziemßenと同一であることをペーター・ド・メンデルスゾーン（Peter de Mendelssohn）はつとに指摘している。なおメンデルスゾーンはトーマス・マンの伝記作家・研究者であり作家でもある。（Vgl. Ebd., S. 69.）。GKFA には、エッセイ「オカルト体験」（Bd. 15-1, S. 611-652.）のほか、以下のテクストも所収されている：「オカルト実験集会に関する 3 つの報告」（*Drei Berichte über okkultistische Sitzungen*）. GKFA, Bd. 15-1, S. 587-602.

10 Hans Driesch: *Parapsychologie und anerkannte Wissenschaft*. In: *Hochland.* XXIII, S. 82-94.

11 Hans Driesch: *Unsterblichkeit.* In: *Zeitschrift für Parapsychologie.* 1926. S. 38-41.

12 Hans Driesch: *Die Methoden der parapsychologischen Theoriebildung.* In: *Zeitschrift für Parapsychologie.* 1927. S. 478-488.

13 Hans Driesch: *Die Frage der Sicherheit in der Parapsychologie.* In: Ebd., S. 530f.

14 Hans Driesch: *Parapsychologie und Philosophie.* In: Ebd., S. 589-603.

15 Thomas Miller: *Konstruktion und Begründung. Zur Struktur und Relevanz der Philosophie Hans Direschs.* Georg Olms Verlag, Hildesheim/Zürich/New York 1991. S. 284ff.

16 Vgl. Immanuel Kant: *Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume der Metaphysik.* In: *Immanuel Kants Werke. Band II. Vorkritische Schriften.* Hrsg. von Artur Buchenau. Verlag Dr. H. A. Gerstenberg, Hildesheim 1973.『視霊者の夢』は「好奇心旺盛な上、暇を持て余している友人たちの押しつけがましい要望」（die Nachfrage und Zudringlichkeit vorwitziger und müßiger Freunde: S. 384.）に応じてカントが「およそ感謝されそうにない題材」（ein[ ] undankbar[er] Stoff: S. 384.）、すなわちエマニエル・スヴェーデンボリ（1688-1772）と取り組まざるを得なかった、としている小論であるが、カント自身スヴェーデンボリにいささか興味を持っており、直接書簡を送ったりもしていることから見て、「やむを得ず執筆した」というのは韜晦の一種と考えてよさそうである。第一部「独断編」、第二部「歴史編」からなるこの小論で、カントがスヴェーデンボリを揶揄しているのは第二部においてである。カントはスヴェーデンボリの大著作は「[…] もはや一滴の理性も見当たらない」（[...] völlig entleert ist [...] von einem jeden Tropfen derselben（=der Vernunft）: S. 376.）、「ナンセンスだらけの」（voll Unsinn: S. 376.）四つ折り版 8 巻からなり、その記述は「狂信的な直観から発した」（aus *fanatischen Anschauen* entsprungen zu sein: S. 377.）ように思われる、とする。またカントは論の後半で、「相当悪質な夢想家のとてつもない幻想をひたすらここに写す」（die wilden Hirngespinste des ärgsten Schwärmers unter allen zu kopieren: S. 382.）ことに飽きてきた、と手厳しい。もっともカントはスヴェーデンボリを全否定するのではなく ── ドリーシュもそうであることを本論で述べるように ── この種の現象に関して「本当のところ」は分からないのである、という態度をとる。「我々はおそらく、来世において新しい経験と新しい概念を通じ、我々の思考する自我の中にある、まだ我々に隠されている諸力について教えられるまで、ただ待つ他はなかろう」（Wir müssen also warten, bis wir vielleicht in der künftigen Welt durch neue Erfahrungen und Begriffe von denen uns noch verborgenen Kräften in unserm denkenden Selbst werden belehrt werden. : S. 388.）。カントのスヴェーデンボリに対する態度はアンビバレントでアイロニカルだが、この論文の副題が「形而上学者の夢によって解明された」とあるように、カントは形而上学的哲学に対しても自己アイロニーを示している。スヴェーデンボリの大著は理性的な人間なら我慢してやっと耳を傾けるような「童話」（Märchen:

S. 372.）であろうが、それを哲学の研究論文に仕立てる自分は、何者なのであろう。「[…] 哲学も […] 形而上学という怠け者の天国が生み出した童話に過ぎない以上」（[...] da die Philosophie [...] ebenso ein Märchen war aus dem *Schlaraffenlande* der Metaphysik: S. 372.）スヴェーデンボリを取り上げるのは、決して不適当なことではない（nichts Unschickliches: S. 372.）、とするのである。ただしカントはその後、ドリーシュとは異なり、思索可能な悟性の適用範囲を限定し、ここで問題になっている超常現象ならびに「神」を哲学の対象から外すことになる。なおショーペンハウアーは、カントが『視霊者の夢』第一部で霊的現象を批判しているのは、この現象に関する説明がことごとく「心霊論的」（spiritualistisch）だからである、としている。Vgl. Arthur Schopenhauer: *Parerga und Paralipomena I.*（Versuch über das Geistersehen）In: *Arthur Schopenhauers Werke in fünf Bänden. Nach den Ausgaben letzter Hand.* Hrsg. von. Ludiger Lütkehaus. Haffmans Verlag. Bd. IV. S. 229.

17 Thomas Miller: *Konstruktion und Begründung.* a. a. O., S. 229.

18 Franz Anton Mesmer（1734 -1815）についてはジャン・チュイリエ：『眠りの魔術師メスマー』（高橋純・高橋百代訳、工作舎、1992年）を参照した。

19 メスマーの弟子ピュイセギュール侯爵は、1784年、磁気療法中に睡眠状態に入った「患者」が通常ではない知性を発揮し、中には自ら体内の故障個所を「透視する」ものもいたことを観察している。吉田進一「動物磁気からサブリミナルへ —— サブリミナルの思想史」『舞鶴高等工業専門学校紀要』Nr. 33、1998年、139頁参照。

20 Hans Driesch: *Parapsychologie. Die Wissenschaft von den „okkulten“ Erscheinungen. Methodik und Theorie.* Verlag F. Bruckmann AG., München 1932. Ohne Seitenangabe. ショーペンハウアーの原典に関しては Vgl. Arthur Schopenhauer: *Parerga und Paralipomena I.* a. a. O., S. 229. この版ではドリーシュの引用と異なり、Hellsehens ではなく Hellsehns と綴られている。

21 Ebd., S. 1.

22 Ebd., S. 1. なお experimentum crucis はドイツ語では Kreuzesversuch と訳され、それが失敗すればその当の実験が基づいている理論が論駁ないし克服されるような実験を意味する。英語では crucial experiment あるいは critical experiment と言う。

23 Ebd., S. 2.

24 Ebd., S. 4.

25 Ebd., S. 5.

26 Ebd., S. 6. もっともドイツでは *Zeitschrift für Parapsychologie* という雑誌が1926年から1934年にかけてライプツィヒで刊行されており、ドリーシュも多数寄稿していた。なお1957年から1968年にかけても *Zeitschrift für Parapsychologie und Grenzgebiete der Psychologie* という雑誌が刊行されており紛らわしいが、ドリーシュの死（1941年）後のものであり、本稿の関心からははずれる。

27 Ebd., S. 7.

28 これが今なおアクチュアルな問題であることは、多言を要しない。

29 Hans Driesch: *Parapsychologie.* a. a. O., S. 7.

30 Ebd., S. 17.

31 Vgl. Ebd., S. 19.

32 Vgl. Ebd., S. 27.

33 Vgl. Ebd., S. 28.

34 Vgl. Ebd., S. 28.

35 Vgl. Ebd., S. 28f.
36 Vgl. Ebd., S. 34.
37 Reinhard Mocek: *Die werdende Form. Eine Geschichte der Kausalen Morphologie.* Basilisken-Presse, Marburg an der Lahn 1998. S. 275.
38 Hans Driesch: *Parapsychologie.* a. a. O., S. 86f.
39 Ebd., S. 87.
40 Ebd., S. 60.
41 Ebd., S. 61. ドリーシュは強調に斜字体と隔字体の両方を用いているが、引用では斜字体に統一した。また以下強調はすべてドリーシュによる。
42 Ebd., S. 61.
43 Ebd., S. 62.
44 Ebd., S. 62.
45 Ebd., S. 64.
46 Ebd., S. 110.
47 Ebd., S. 88.
48 Herbert Freiherr von Klöckler: *Astrologie als Erfahrungswissenschaft.* Verlag Emmanuel Reinicke, Leipzig 1927. クレックラー男爵（1896-1950）はドレースデン生まれの医師で、占星術の「改善」に尽力した。「改善」の意味するところは、占星術に統計的なデータを導入しようとしたことを指す。『経験科学としての占星術』という書名が、如実にそれを物語っている。クレックラー男爵は、占星術にありがちな決定論（Determinismus）を排し、人間の性格は常に発展途上にあるものであると捉えた。Vgl. http://www.astrologie-dresden.de/freiherr_von_ kloeckler.php（接続日：2017年５月８日）
49 クレックラー男爵の同上書は「形而上学と世界観（Metaphysik und Weltanschauung）」という叢書の一環を形成していたが、この叢書の監修者はドリーシュとシングニッツであった。シングニッツ（Werner Schingnitz; 1899-1953）はドリーシュのもとで学位をとった哲学者であるが、のちにナチスに急接近し、リベラル派であった師のドリーシュとは袂を分かつことになる。
50 Herbert Freiherr von Klöckler: *Astrologie als Erfahrungswissenschaft.* a. a. O., Zur Einführung. Ohne Seitenangabe.
51 Ebd., Ohne Seitenangabe.
52 Albert Freiherr von Schrenck-Notzing: *Gesammelte Aufsätze zur Parapsychologie.* Hrsg. von Gabriele Freifrau von Schrenck-Notzing. Mit einer Einführung von Prof. Dr. Hans Driesch. Union Deutsche Verlagsgesellschaft, Stuttgart/Berlin/Leipzig 1929. Ohne Seitenangabe.
53 Hans Driesch: *Parapsychologie.* a. a. O., S. 2.
54 Ebd., S. 3.
55 Ebd., S. 3.
56 Ebd., S. 3.
57 Ebd., S. 147.
58 Vgl. Ebd., S. 147.
59 Ebd., S. 148.
60 Ebd., S. 149.
61 注58参照。

62 Hans Driesch: *Parapsychologie.* a. a. O., S. 148.
63 Hans Driesch: *Philosophie des Organischen. Vierte, gekürzte und teilweise umgearbeitete Auflage.* Quelle & Meyer, Leipzig 1928. S. 126.
64 福元圭太：「ハンス・ドリーシュ試論 ──「エンテレヒー」の行方（1）──」同上論文、７頁。
65 Hans Driesch: *Philosophie des Organischen.* a. a. O., S. 310.
66 Ebd., S. 330.
67 Hans Driesch: *Parapsychologie.* a. a. O., S. 110.
68 Ebd., S. 110.
69 Ebd., S. 111.
70 Ebd., S. 111の注に以下のようにある。「空間について『４次元』などというナンセンスは、ここでは無視してもよかろう。空間は何といっても３次元しかない。」（Man denke hier aber ja nicht an den Unsinn einer „vierten Dimension“ des Raumes. Der hat nun einmal drei Dimensionen.）
71 エンテレヒーを「調整卵に見られる調和等能系を可能にする要因」ないし遺伝子に書き込まれている情報と捉えるならば、「空間外の」経路は必要ない、という主張があるかもしれない。しかしフランシス・クリックが科学雑誌 *Nature* にわずか２ページの DNA の二重螺旋構造に関する論文を発表したのは、ドリーシュの死後12年を経た1953年のことである。エンテレヒーを実体的に捉えていたドリーシュは、それが因果論的に「空間外から空間外の経路を通って空間内に作用する」と考えたのである。いわゆる調整卵の特徴である調和等能系について、詳しくは福元圭太：「ハンス・ドリーシュ試論 ──「エンテレヒー」の行方（1）──」４頁以下。
72 福元圭太：「ハンス・ドリーシュ試論 ──「エンテレヒー」の行方（1）──」同上論文、４頁以下。
73 Hans Driesch: *Parapsychologie.* a. a. O., S. 111.
74 Ebd., S. 111.
75 Ebd., S. 111
76 Ebd., S. 112.
77 Ebd., S. 112.
78 Ebd., S. 112.
79 Spiritismus については、その名称がどうしても「『スピリッツ』（＝ブランデー）を想起させる」（an „Spiritus“（=Branntwein）erinnernde[r] Name）ので「最初から馬鹿げたニュアンス」（von vornherein einen lächerlichen Beigeschmack）をまとっており、それが人々の拒否的な反応を惹起する、とドリーシュは言う。また Spiritismus を、ライプニッツから術語を借用して「モナディズム」（Monadismus）と呼び変えてはどうか、と提案している。Vgl. Ebd., S. 124.
80 Herbert Freiherr von Klöckler: *Astrologie als Erfahrungswissenschaft.* a. a. O., Zur Einführung. Ohne Seitenangabe.
81 Hans Driesch: *Parapsychologie.* a. a. O., S. 6.
82 これについては例えば『神々と獣たち　ナチ・オカルティズムの謎』ダスティー・スクラー(山中真知子訳)、大陸書房、昭和63年を参照。
83 その大部分は生前の1938年から39年にかけて執筆されていた。ドリーシュは1941年４月16日に没している。Vgl. Hans Driesch: *Lebenserinnerungen.* a. a. O., S. 306.
84 Ebd., S. 298f.
85 注62参照。
86 福元圭太：「ハンス・ドリーシュ試論 ──「エンテレヒー」の行方（1）──」、同上論文１頁を

参照。米本昌平はドリーシュの生気論が「撲滅すべき迷妄の典型」とされていたことを伝えている。もっとも米本はドリーシュ再評価の急先鋒である。ハンス・ドリーシュ：『生気論の歴史と理論』米本昌平訳、書籍工房早山、2006年、316頁参照。

87 Vgl. Hans Driesch: *Die Lokalisation morphogenetischer Vorgänge. Ein Beweis vitalistischen Geschehens*. In: *Archiv für Entwicklungsmechanik*. VIII. Leipzig 1899. S. 35-111.

88 注 4 を参照。

89 Vgl. Joachim Radkau: *Max Weber.* Hanser, München/Wien 2005. S. 430.

90 Ebd., S. 430.

91 もっともヴェーバーは1913年あたりからドリーシュを尊敬するようになり、自分のサークルに招待してもいる。しかし両者の関係は冷えたままであった。Ebd., S. 430. また Vgl. Hans Driesch: *Lebenserinnerungen.* a. a. O., S. 149.

Hans Driesch und Parapsychologie

— Die Tragweite der „Entelechie“ (2) —

Keita FUKUMOTO

In der vorliegenden Arbeit wird die Monografie *Parapsychologie. Die Wissenschaft von den „okkulten“ Erscheinungen. Methodik und Theorie* von Hans Driesch aus dem Jahre 1932 ausführlich analysiert und erörtert.

Hans Driesch interessierte sich seit 1903 für parapsychologische Phänomene wie Hypnotismus, Suggestion, Bewusstseinsspaltung, Telepathie, Hellsehen, Prophetie, Psychometrie, Telekinese, Spuk, Materialisation usw. Seit 1913 war er auch Mitglied der Londoner „Society for Psychical Research“ und von 1926 bis 1927 sogar deren Vorsitzender. Die obengenannte Monografie war das Ergebnis seiner langjährigen Beschäftigung mit der Parapsychologie und gilt als die „erste Methodenlehre“ auf diesem Gebiet.

Seit Kants *Träumen eines Geistersehers* von 1766 hatte die deutsche Philosophie parapsychologische Fragen und paranormale Phänomene völlig außer Acht gelassen. Driesch betont, dass Schopenhauer hier die einzige Ausnahme sei, und zitiert daher ihn als Motto seiner Monografie: „Wer heut zu Tage die Thatsachen des animalischen Magnetismus und seines Hellsehens bezweifelt, ist nicht ungläubig, sondern unwissend zu nennen.“ (Schopenhauer, Parerga I, 1850)

In seiner Monographie bemüht sich Driesch zu klären, wie man absichtliche und unabsichtliche Täuschungen bei parapsychologischen Experimenten vermeiden könnte, und versucht sich an der Formulierung einer Theorie der Parapsychologie. Beide Vorhaben sind aber m. E. misslungen. Denn Driesch muss zum einen eingestehen, dass „in keinem einzigen Fall die Untersuchungsbedingungen eine taschenspielerische Täuschung seitens des Mediums oder eines Teilnehmers vollständig“ ausgeschlossen werden konnten. Zum anderen ist die Formulierung einer Theorie der Parapsychologie an sich unmöglich, da Tatsachen über parapsychologische Phänomene nicht genügend bekannt waren, sind und sein werden.

Warum hat Driesch dann diese Monografie überhaupt verfasst? Das hängt damit zusammen, dass sein „Entelechie“-Begriff mit der Parapsychologie in einem Punkt in einem engen Zusammenhang steht, denn beide müssen „einen Weg außer dem Raum“ voraussetzen.

Bei Phänomenen wie Telepathie und Hellsehen findet der „*Erwerb des Wissensinhaltes eines anderen ohne Vermittelung der Sinnesorgane*“ statt. „Im Raum, [...] auf Raumeswegen oder durch den Raum hin kann [...] die Übertragung“ des Wissens zwischen dem Agenten (= Sender) und dem Perzipienten (= Empfänger) bei einem paranormalen Wissenserwerb nicht stattfinden. Dies ist auch — wie Driesch bemerkt — bei der Entelechie der Fall: „Wir können geradezu sagen: Entelechie wird von räumlicher Kausalität affiziert und wirkt auf räumliche Kausalität, als wenn sie von jenseits des Raumes herkäme: *sie wirkt nicht im Raum, sie wirkt in den Raum hinein;* sie ist nicht im Raum, im Raum hat sie nur

Manifestationsorte.“ Bei beiden braucht man „nicht von Materie ausgehende, sondern vielmehr, sozusagen, ‚in den Raum hinein‘ wirkende Agentien einzuführen“. Hier stellt der Vitalismus also eine Brücke zur Parapsychologie dar.

Der Vitalismus Hans Drieschs mit seinem „Entelechie“-Begriff wurde und wird „gelegentlich, in völliger Verkennung der Bedeutung des Wortes“, [...] Mystik genannt. Driesch will mit seiner Monografie die Parapsychologie als eine Wissenschaft darstellen, damit auch sein Vitalismus als eine Wissenschaft verstanden werden soll.